

伝統文化を継承していくとは

～本質を見極め、末節にこだわらない～

インバウンド対策が重視され、あらためて「日本文化」が注目されている。会員セミナーでは「日本文化の再発見」をテーマとする講演会を定期的を開催する。その第1回として、小笠原流の継承者、小笠原清基氏が「小笠原流弓馬術礼法とその継承」について語った。

講師：小笠原 清基 氏

特定非営利活動法人小笠原流・小笠原教場 理事長
一般社団法人日本文化継承者協会 代表理事



●●●●● 実用、省略、美を重んじ 当たり前のことを当たり前に

「家業(小笠原流を教えること)を生業にしない」という家訓を持つ小笠原家は、平安時代の第56代清和天皇から始まる。いわゆる清和源氏の家系の一つで、第80代高倉天皇のときに「小笠原」姓を賜った。そして、初代の小笠原長清が源頼朝の「糾方」(礼法、弓術、弓馬術)師範となり、その後も、将軍家の師範としてこの三つを伝えてきた。

礼法は、作法やマナーなどのような生活様式のことで、「七五三」のような人生の通過儀礼なども司っている。弓術は、「破魔矢」の原型になった「大的式」という儀式を鎌倉時代から伝えている。弓馬術は馬の上で弓をひくこと。流鏑馬と笠懸を執り行っており、近年は海外でも流鏑馬を行っている。

中でも特に重視されたのは礼法で、聖徳太子の時代から国を治める上で重要なものとされていた。まさに「人としての最低限のルール」という表現が最も適切だろう。

礼法で大切なのは「考え方」で、それに従って動く場合にどういう手順を踏むかを考える。もう一つ重要なことは、常に同じ所作をするということ。常に当たり前のことを当たり前にできることが必要だ。

そして実用・省略・美も大切だ。形

ありきでは実用性を失いがちになる。実用と省略は武家にとって非常に重要で、実用的でなければ戦う意味がない。省略した、隙のない動きをするから、勝てる。そして、省略することで美しさも出せる。これは日常の動作にも共通していえることだ。

小笠原流では本質だけを伝えるが、本質を見極めるために重要となるのが反復稽古だ。小笠原家の稽古は基本稽古と応用稽古の二つに分かれる。基本稽古には、立つ、座る、歩く、お辞儀する、物を持つ、廻るという六つの動作がある。これらの動作は全て無駄が省かれており、普段の動きでは使わない筋肉を使う。大変な動きだが、稽古を繰り返すことで心が鍛えられ、考え方も成熟して本質が見えてくる。

すると「心に一張の弓を持つ」ことになり、常に一定の緊張感を持てるようになる。稽古を続けるうちに、上に立つ者に求められる「極めれば無色無形なり」(形を作ることではなく、醸し出すことが重要という意味)を見いだしていくのだ。

●●●●● 日本文化継承者協会を設立 公的機関からの依頼の受け皿に

伝統文化の継承には、「技」と「精神性」

そして「道具」の継承がある。技は門人の育成、精神性は武家の考えを伝えることになる。道具の継承で重要なのが材料や職人の技をしっかりとつなげていくこと。伝統的な材料に頼るだけではなく、FRPなどの現代の技術も活用していくことも必要だ。

また、新しいことに取り組めるように、小笠原流の本体、一般財団法人礼法弓術弓馬術小笠原流のほかに、特定非営利活動法人小笠原流・小笠原教場も設立。さらに、公的機関などから継続的な依頼を受けられるように、多くの伝統文化の方と協力して、日本の文化の継承を目的とした一般社団法人日本文化継承者協会を設立した。

今後は伝統文化と企業、経済活動をつないでいくことを考えている。経済活動にはわれわれもまだ弱い。企業の方々にも、経済活動の中で伝統文化を捉え直していただき、お力添えを賜りたい。伝統文化を継承していくには、そこで経済が回り、伝統文化が国内外へ伝わっていき、日本の価値が上がるというサイクルが必要だろう。